
夜明けの魔術師

toto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜明けの魔術師

【Nコード】

N91530

【作者名】

tototo

【あらすじ】

はじまりは一通の手紙だった。

幼馴染の魔術師アキサリスに便乗して、一緒に王都を目指す村娘リン。けれどその道のりはどうも厳しい。

流血表現がありますが、ゆるいファンタジーになる予定ではありません。

手紙

春風が運んでくる、ここちよい花のかおり。

あつたかなおひさまとぽかぽか陽気。

ことりたちのさえずり、草木をゆらす風のおと。

平和だなあ。平和すぎて、あくびがでちゃう。

つい、うとうとってしそうになる体をひきしめて、わたしはうつそうと茂る緑の中へ足を踏み入れる。

おおきな森だった。

じっさいにどれくらいおおきいかは、じつはよく分かってない。でも、とてつもなく広いつてことは実感できていた。だって、歩いても歩いてみずーつと緑が途切れないのだ。

すこく昔に、中央の国からおおきな軍隊がやってきて、この森の広さを調べたことがあったらしいけど。一昼夜あけたあとに全員、森の入り口に戻ってきたらしい。誰も、森の向こう側をみないまま、ずっと北にむかってまっすぐ進んでいたはずなのに、もとの場所に帰ってきてしまうなんておかしい話だってみんな首を傾げた。そのときのえらい学者さんはいった。うつそうとした森に惑わされて、方向感覚が狂ってしまったんだろうって。

でも、不思議と、この森の向こう側をみたひとがいた話はだれも聞かない。

いつからか、この森には終わりが無い、はてがないってささやかれるようになった。

だから、ここは、はてなしの森って呼ばれている。

べつに害があったりするわけじゃないし、むしろめぐみのほうが多いけど、立ち入るひとは少なかった。やっぱり、気味悪いんだろ
うな。

「アキちゃん。アキちゃん、どこー？」

そんなところに、好き好んで毎日のように足をはこぶひとがいる。
わたしの幼馴染のアキサリス。アキちゃんだ。

森に行くとい、アキちゃんはお昼時になっても戻ってこない。だから、アキちゃんのお母さんに頼まれてわたしが迎えにいのはめになる。

別に森に入ることに対して抵抗はないし、むしろ、ちょっとおちつくし好きな雰囲気だなあと思うけど、アキちゃんを探しにいくとわたしのお昼ごはんの時間が遅れる。そのことが不満だった。いちどアキちゃんにそう訴えると、鼻で笑われた。かわいくない。
「アキちゃん、ごはんだよー。おなかすいたよー。飢え死にしちゃうよー」

ぐうって空腹を訴えるおなかをさすって慰めながら、けなげにアキちゃんを探す。そうしていると、どこからかがさがさって音がしてアキちゃんが現れた。もっと早く出てきてくれればいいのに。
「せっかく出てきてやったのに。なんだよ、ぶっさいくな顔しやがって」

相変わらず、愛想のない態度だ。ただでさえ目つきが悪くて怖い顔なのに、薄氷のような目に剣呑な光が宿るとさらに凶悪になる。それでも、ぼさぼさの枯れ草色の髪をもうちよつと整えてくれたら、チンプラみたいな見た目も少しはマシになると思っただけだな。

「ぶさいくっていった！ひどい！」

「腹すいたくらいでぶーたれてるおまえが悪い」

ぶくーって膨らませていたわたしの両頬を、アキちゃんは容赦なく手のひらでつぶした。痛い。おっきい手に挟まれたまま、くいつと上を向かせられるとアキちゃんの鋭い目がすぐ近くにあった。

「おなかすいた！」

「うるせー。耳元でキンキンわめくなよ。おら、帰るぞ」

アキちゃんは口の中でちいさく言葉をつぶやいた。そのまま、おでことおでこをくつつけて、そこからわたしがぜんぶ、アキちゃんとおなじものになってしまったような奇妙な一体感。浮遊感。

その一瞬後、わたしたちはアキちゃんの家裏手にある草原に降り立っていた。

これ、魔法っていうらしい。こんな風に、一瞬で場所を移動することができるなんて、つくづく便利だ。

わたしも使ってみたけれど、残念ながら、まったく才能がなかった。アキちゃんはお父さんが魔法使いで、才能もあるし環境もいい。凡人のわたしにとっては、なんだかうらやましい話だった。

「こんな手段もってるんだから、ぱぱっと時間どおりに帰ってきてよ。そしたらおばさんだってわざわざわたしを迎えにやろうなんて思わないよ。わたしはおなかすかないし、アキちゃんも邪魔がはいらないし、みんなしあわせだよ！」

「……。あそこにいると時間が分からなくなるんだよ」

「ふーん。そっかー。アキちゃんにも私の正確な腹時計を分けてあげたいなあ。便利だよ」

「いらねー」

アキちゃんはわたしをおしのけると、さっさと家に向かって歩き出した。

昔はもうちょっとかわいかったのになあ。いつからかすっかり無愛想な男の子になっちゃって、わたしは寂しい。

ゆううつになりかけていたわたしの鼻腔に、なんともいえない芳しい香りがすべりこんできた。ごはんだ。アキちゃんの家のごはんは、とびつきりおいしい。アキちゃんを迎えにいったあとは、ここでおひるをご馳走になるのがわたしの幸せな日課だった。

「おばさん！今日のおひるはなーに？」

アキちゃんのうしろを追いかけて、家に飛び込めば、白いエプロンをつけたアキちゃんのお母さんができたてのスープをテーブルに並べているところだった。

アキちゃんのお母さんとはとてもかわいい。

今日はアキちゃんと同じ枯れ草色の髪を後ろで束ねて、水色のワンピースの上から紺色のガウンを羽織るという上品な村娘風の格好

をしていた。こぼれおちそうなくらいおおきな藍色の瞳を細めて、微笑まれると、胸がきゅんっとしてしまう。

「いつもお迎えありがとうね、リンちゃん。助かるわ。今日はね、なんと！鶏肉とおやさいたっぷりのポトフと焼きたてのふんわりパンよ」

「わーい！いったきまーす！」

アキちゃんの隣に遠慮なく座って、ポトフとパンをほおばる。おいしい！

「生きててよかったあーって思える瞬間だー」

「おまえはお手軽でいいな」

このときばかりは、アキちゃんの嫌味なんてぜんぜん気にならない。やつぱり、おいしいごはんってすごく偉大だ。

「はい。リンちゃん、牛乳も飲んでね。アキもちゃんと飲むのよ」「そうだよー。じゃないと、背、おつきくならないんだよ」

気を悪くしたように、アキちゃんはぷいっつと横をむいてしまった。背がちよっと低いことがアキちゃんの悩みの種らしい。乱暴でえらそうな態度のくせに、悩みが小さいなあ。

アキちゃんのこういう弱みをいじるのも、わたしの楽しい日課だった。アキちゃんよりチビなわたしがいつてもたいして堪えないだろうけど。

「……誰かくるな」

「んえ？」

アキちゃんは食事を中断して、玄関にむかった。玄関といっても、小さな家なので、食事をする居間と外は直接つながっている。

だから、ひょいっつと身体を傾ければすぐに外の様子は伺えた。

アキちゃんは訪問者と二、三言かわすとすぐに扉を閉じた。その手には上等そうな白い封筒に、仰々しい赤い蠟印がしてある。このあたりではまず使わなさそうなものだ。

「手紙屋さん？めずらしーね」

「ああ。おやじ宛で、急ぎの用件らしい。おふくろ、おやじどこに

いるんだっけ」

おばさんは家の外をまっすぐに指差した。

「外の書斎に引きこもってるわよ。届けてあげて」

「わかった」

そう応えて、アキちゃんは出て行った。

なんだか、家の中の空気が重い。気のせいだろうか。

こころなしか、おばさんは怒っているようだった。じつとわたしが見つめていると、いつもどおりの笑顔を浮かべてくれたけど、なんだか不安だ。

「わたし、帰ったほうがいい？」

「ううん。いてくれたほうが、いいかもしれないわね」

おばさんのその言葉は、いつそうわたしを不安にさせた。

なにか悪い報せなんだろうか。

おばさんは、なにか心当たりでもあるのだろうか。

アキちゃんが、アキちゃんのおとうさんを連れて戻ってくるまでわたしは気が気じゃなかった。

あ。もちろん、ポトフは残さず食べたけど。

楽園への招待

「王都ってとおいんだねえ」

「馬車でいけば、四〇五日ってところだな。村から乗合馬車の駅まで丸一日かかる」

「そっかあ。なんだか旅行みたいでわくわくするねえ」

「……。おまえは気楽でうらやましいよ」

アキちゃんのお父さんの元に送られた手紙は、なんと、王都に住むえらいひとからの招待の手紙だったらしい。おじさんって、無口で静かだから、なにをやってるのか、なにを考えてるのかよく分からないなぞのひとだったんだけど、王都ではとっても有名な人なんだって。

偏屈者でも有名だから、実力があってもこんな風に召集されることは滅多にないんだっておばさんが言っていた。つまり、それだけ切迫したなにかがとおい王都では起こってるんだろう。

けど、詳細なことはなにも書いてなかったらしい。

おじさんは手紙に一度目を通してから、静かに言った。

「アキサリス、ぼくの代わりに行ってくれるね」

頼みごとでも、ましてやお願いででもない。おじさんの中の決定事項だ。アキちゃんはいやあーな顔をしたけど、しぶしぶといった感じで了承した。

おばさんはなにも言わなかった。黙って、アキちゃんの荷造りの世話を焼いていた。

旅装束に身を包んだアキちゃんは、さながら、夜盗のようだった。暗がりであつたら、ぜったい悲鳴をあげてしまう感じた。黒で統一された長袖と下ばき、羊の皮で作られたブーツにそろいの手袋。土色の麻布のマントを頭からすっぽりとかぶる形で身体にまきつけている。うん、近づきたくない。目、怖いし。

簡素な服装の中で、目をひくのは赤い首飾りだった。こどものこ

るにも首からさげているのをみたことがあるけど、ずっとつけていたのかな。赤くて丸い宝石を銀の鎖で通したシンプルな首飾り。お守りみたいなものなのかもしれない。

一方、わたしといえば。

紺色のフード付きの膝元まであるローブを着て、さらに上から同じ色のマントをまとっている。動きやすいように作業用のズボンをはいて、金属ちつくなあまり綺麗な色じゃない髪の毛は、うしろで束ねるだけにした。いちおう、旅だから、あまりかわいい格好はしていない。

「ところでさ、おまえ、疑問におもわねーの？」

「なにを？」

「王都に呼ばれたのはおやじ。でも、おやじは今、手が離せない用事があるから代理で俺が王都に向かうことになった。ここまではいいな」

「うん」

「で、なんでおまえもついてくることになったのかってことだ」

そう。アキちゃんの王都への旅路に、なんと、わたしも同行することになったのだ。

「おばさんが、アキちゃんをひとりで王都に向かわせるのは不安だからだつて言つてたよ！いわば、わたしは、アキちゃんの保護者になるのです」

「それでおまえは納得できるのか……そうか……」

アキちゃんは、複雑そうな顔でわたしをみつめた。言葉を飲み込んだつもりだろうけど、アキちゃんの目は雄弁に語ってくる。裏があるに決まってるだろうが、なんでもっと考えようとしななんだ、と。

わたしだつて、疑問に思わなかったわけではない。でも、わたしはアキちゃんのお母さんとお父さんを信用している。

両親のいないわたしを、娘のようにかわいがってくれたひとたちだ。そんなひとたちを疑うなんてできなかった。それに、アキちゃ

んをひとりで王都に送り出すのはやっぱり、わたし自身も心配だったのだ。……なんていうと、ぜったいアキちゃんをあきらめるだろうけど。

「なによ。その、可愛いそーな子を見るような目は」

「いや、俺がすっかりしなないといけなないと、改めて再認識していただけだ。……はあ」

「ため息！わたし、アキちゃんと王都まで旅行できるの楽しみにしてるのに」

「そんな気軽じゃねえんだよ。こっちは。せいぜいおとなしくして、足をひっぱるような真似はしてくるなよ」

そう言われて、わたしはもちろん！とない胸をはって言った。

だって、村をおりて、山ろくの乗合馬車の駅までいったら、あとはずーっと馬車旅なのだ。

なにも考える必要はない。がたがた揺られているだけで、自動的に王都につくのだから。

だというのに。

わたしは、さっそく足をひっぱっていた。

「くらいよー。さむいよー。アキちゃん、どこー？」

日はすっかりおちて、あたりは冷え込んでいた。これが大地の上ならまだよかったのだけど、石畳はひんやりとした冷気を反射するだけでわたしをあつたかく包んではくれない。石造りの箱の中で、ゆいいつ外へと続く扉は鉄格子に覆われて、引いても押してもびくともしない。

閉じ込められたのだ。

ふもとの村を目指して、早朝、ふたりで故郷の村を離れて山をおりはじめたところまではよかった。

太陽が真上にほどなく到達するころあいになって、わたしの腹の虫がないた。こらえ性のないわたしはアキちゃんにごはんをねだった。渡されたのは乾パンだった。当然、わたしは抗議した。そこからは喧嘩だ。旅立ってわずか数時間、わたしたちは喧嘩別れした。

ふもとの村に続く道は、ふたとおりあった。獣道と正規の道。悠悠々自適に整備された道をおりるアキちゃんに、あつかんべーと舌をだして、わたしは獣道を駆け下りた。

おもえば、それが間違いだったのだ。

気がつくと迷っていた。あるようでない、ないようである道を素人が渡るなんて無理があつたのだ。思わず、アキちゃんの名前を呼びそうになったけど、我慢した。

とりあえず、下へ下へと降りていけば、ふもとにたどり着くだろう。不安を押し込めてそう結論付けると、わたしはとにかく足を動かした。

「うえ？」

なんの脈絡もなく、首筋に衝撃がはしった。そして、暗転。今に至る。

ほんと、ここ、どこだろう。村の近くの山の様子はある程度把握しているつもりだったけど、こんな石造りの人工物があるなんてしなかった。

冷え冷えとした空気に、ぶるりと身が震える。マントを前でかき合わせて、鉄格子に近づいてみる。

「すみませーん。だれかいませんかー？」

返事はない。しんとした暗闇がただ広がっていた。

いま、何時くらいかなあ。わたしの腹時計は、ぺこぺこすぎて機能していない。

アキちゃん、もうとつくにふもとの村についたかな。ひとりで、王都に向かう馬車に乗ってしまったのかな。もう会えないのかなあ。ひとりで閉じ込められていると、いやなほうへいやなほうへ思考がむく。

とりあえず、いまはなんとかしてここから脱出しないと。じつとしていても、事態がいい方向にむくとは思えなかった。

「でも、どうしよう」

わたしは、アキちゃんみたいに魔法が使えない。それに、とくべ

つ力があるというわけでもない。もし、魔法が使えたら一瞬でこんなところから抜け出せるし、力があれば鉄格子をやぶって逃げることもできる。

結局、こうして手をこまねくことしかできないのだと、痛感させられた。

才能ないからっていつて、おじさんの魔法のほどきから逃げなかったらよかったな。力がないからっていつて、おばさんの護身術の教えを断らなければよかったな。アキちゃんと、あんなことで喧嘩なんてしなきゃよかったな。

なんだか、どうしようもない後悔ばかりが押し寄せてきた。

そのとき、ゆらりと空気が揺れた。煌々とした赤い光に闇が退けられる。同時に、かつん、かつんと闇を割るように、静かな足音が聞こえてきた。

凶暴な光に姿を暴かれて、わたしは目をつむった。がちやがちやと鉄格子の鍵をあける音がする。誰だろう。怖い。身をすくめて、わたしはしゃがみこんだ。

触れたのは、おおきな男の人の手だった。無遠慮な手つきでわたしの腕をとると、無理やり立たせる。足にうまく力がはいらなかった。ちらつと男の人の顔をうかがおうとしたけれど、男の人は顔中に包帯をまいていて、見えるのはどろりとした不気味な目だけだった。

「歩け」

少ししゃがれた声。誰なんだろう。誰なんだろう。ぜんぜん知らないひとだ。

男の人に導かれるまま、わたしは歩いた。細い石造りの通路だった。けっこうな距離を歩いたように思う。それとも、恐怖のあまり感覚がおかしくなっていたのかもしれない。

やがて、わたしの目の前に木で作られた扉が立ちはだかった。

うしろを振り返ると、男の人が顎で入れと促した。

扉のとつてに手をかける。なんとなく、あけたくないなと思った。

開けたら、もう二度と光を拝むことができなくなる気がした。

ぐずぐずとするわたしに業を煮やしてか、いきなり男の人がそばにあった金属製のバケツをおもいきり蹴った。乱暴な音に心臓が縮んで、男の人から逃げるように、わたしは扉を開けて中に滑り込んだ。

目の前に広がる光景が、信じられなかった。

無数のランタンが壁にかけられていた。部屋の広さはアキちゃんの家の間くらいで、そんなに広くはない。石造りの腰掛が全部で三つおいてあった。その腰掛のうちのふたつに、ふたりの少女が並んで座っている。

どちらもみたことのない少女だった。年のころは、わたしと同じくらい。本来は、いきいきとした瑞々しい輝きを放っているであろう肌も、瞳も、なにもかもすべてが濁っていた。

彼女たちの足元からまるく円を描くように広がる染みの色。まるで絵の具をぶちまけたような無造作さ。ランタンのあたたかい光に照らされて、異様な光景が広がっていた。

「なに、ここ」

ずっしりと胃のあたりが重くなって、ほとんどなにも食べてないのに吐きそうになった。うしろで、かちやりと音がした。わたしをここまで連れてきた男の人が、扉に鍵をかけたのだろう。

へたりこむわたしを、男の人が無理やり立たせる。そして、最後のパンツをはめるように、わたしを石造りの腰掛の上に座らせた。

「いい夜だ」

頷けるわけがない。

「これで、世界は変わる。偽物は消えて、本物が残る。果たしてどちらが真実なのか、君に見せられないのが残念だ」

流暢にしゃべって、男の人は、真新しいナイフでわたしの頬をすうつとなでた。ぴりりと肌を裂く音がしたのに、痛みはなかった。全身が麻痺したかのように、動けない。

わたし、殺されちゃうんだ。

じわりと恐怖がめじりから零れ落ちる。男の人は、まるで恋人を
いつくしむかのように、優しい手つきでそれをぬぐってくれた。加
虐者と被虐者の奇妙なバランスは、まるでこの男の人に愛されてい
るのではないかという錯覚をわたしに与える。そんなのまやかしな
のに。

「ばいばい」

ぎらりと、ナイフが凶暴な光を宿した。

目を瞑ることも、身体をよじって逃げ出すこともできずに、わた
しはただその切っ先をばかみたいに見つめていた。

風が吹いた。

どこにも、風が吹き込むような場所があるとは思えない小部屋の
中で、とつぜん、風が巻き起こった。

次の瞬間、ふわりと土色のマントが私の目の前に広がった。

信じられない。アキちゃんだった。

アキちゃんは俊敏な動きで男の人のナイフを蹴り落とすと、わた
しを荷物みたいに抱えて後ろに下がった。小さな部屋だから、あま
り距離がとれるとは思えない。

男の人は動揺したようだったが、すぐに気を持ち直したようだっ
た。腰からもう一本ナイフを引き抜くと、真正面から対峙する。

「魔術師か。なぜ邪魔をする。もうすぐ、世界の真理がおとずれる
というのに」

なめまわすように、男の人はアキちゃんを見据えた。そして、彼
のどろりとした感情のない瞳に、はじめて、喜色が浮かんた。

「その石は……はは、そうか。真実はそこにあつたのか」

アキちゃんは顔をしかめてつぶやいた。地面におろしたわたしの
手を握る手はわずかに震えていた。

「なにいつてんだ、このおっさん」

「し、しらない」

アキちゃんの手をぎゅっと握り返して、わたしは泣きそうになり
ながら答えた。だって、本当にわからないのだ。この男の人はいつ

たいなんなんだろう。急に流暢に話し出したり、簡単に殺そうしたり、喜んだり、わけがわからない。

ただひとつ分かるのは。きっと、わたし、この男の人とは一生分
かり合えないってことだけだ。

男の人は、ゆっくりとわたしたちににじりよってくる。アキちゃん
とわたしがいるのは、この部屋の唯一の出入り口とは反対側だっ
た。逃げ場所はない。どうしよう。アキちゃんの魔法で脱出はでき
ないのかな。

ちらつとアキちゃんを見上げると、アキちゃんは首を振った。あ
まり、頻繁に使えるような魔法ではないらしい。すぐうしろには、
無慈悲な石壁があった。絶望的だった。

「若い魔術師よ、おまえは必ずたどり着く。偽りと嘘に塗り固めら
れた偽物の樂園は」

男の人は、わたしとアキちゃんの目の前で立ち止まり、鋭いナイ
フを天高く振り上げる。

「おまえを殺すだろう」

まるで、呪いの言葉だった。

アキちゃんは、わたしを守るように抱きしめてくれた。ぎゅっと
目を瞑ってくるべきときを待つ。

ごめんね、アキちゃん。わたしが間抜けなばかりに。でも、来
てくれてうれしかった。わたしばかり嬉しくてごめんね。ふたり一
緒なら、死ぬのは怖くないかなあ。アキちゃんにはいい迷惑だった
よね。ごめんね。ごめんね。最後に、おばさんの焼いたアップルパ
イが食べたかったなあ。

散漫な意識が、けれど途絶えることはなかった。

おそろおそろ、目をあけてみると、男の人の口から、ごぼりと赤
い塊があふれおちるのが見えた。

深々と、自分ののど元にささったナイフをいとしげになでて、彼
はゆっくりと石造りの腰掛の上に崩れ落ちた。

展開についていけなくて、啞然としてしまう。なんで。

「あいつ、自分で自分の喉を刺しやがった……」

この異常な出来事を、わたしはうまく消化できる気がしなかった。そして、そんな時間も与えられなかった。

男の人が崩れ落ちた、その数瞬後、この小さな部屋いっばいに明るい閃光がひろがった。無数のランタンの明かりも、夜の暗闇も簡単に飲み込んで、白い光に塗りつぶされる。

ねえ、アキちゃん。

わたしたち、これからどうなっちゃうんだろう。

黒い影

うつそうと茂った森の中を、気の赴くままに散策する。木の葉を透かして照るあたたかな陽光と澄んだ空気がきもちいい。

この森はわたくしのお気に入りの場所だった。内緒で　を抜け出しては、よくひとりでこの空間を楽しんでいた。ここはわたくしだけの場所。わたくしだけが許された場所なのだ。

おだやかな気持ちで大地を踏みしめていると、突如、大きな泣き声が神聖な空間を切り裂いた。

少し甲高く、あまつたれたような、こどもの泣き声。

声の主を探して歩いてみると、すぐに見つけることができた。

ああ、かわいそうに。すっかり怯えて、　に　かけている。きつと　の国のこどもなのだろう。このまま放っておいては　に　み　まれて　になつてしまう。そうなつてしまえば、　することなどできない。

わたくしはこどもを両腕で抱きしめて、あやしてみせた。すこしずつ泣き声がおさまっていく。かわいそうに。このこを　に　す術などあるのだろうか。

ああ、そうだ。わたくしのこの　。これをこのこに与えよう。これは　に祝福された　だ。きつとこのこを守ってくれるだろう。ちいさくかよわいとしごよ。安心なさい。わたくしがかならずおまえを　してみせるから……。

「ううん……かならず、やくそくするから……」

「リン！気がついたのか」

なんだか、背中が痛い。いや、全身が痛くて頭も重くて、気分もわるい。もうちょっとこのまま眠っていたいなあ。

「おい、寝るんじゃない。起きろよ」

しかし、容赦なく肩をつかまれ、がくがくと前後に揺らされる。
なにがなんでも起こすつもりらしい。

「アキちゃん……ひどいよ……」

「なにがひどいもんか。いつまで経っても起きないおまえのほうがひどい」

うつすらと開けた視界に、最初にうつったのはアキちゃんの凶悪な顔だった。目を眇めて、こちらを睨みつけている。ほんきで怒ってるらしい。

ずきずきと痛む頭を押さえながら、わたしはゆっくりと起き上がった。

「今日ってなんかだいじなやくそくでもあったっけ？寝坊してごめんね。だから怒ってるの？」

「は？なに寝ぼけてんの。しっかりしろよ」

アキちゃんにつっぱねられて、わたしはすこしだけ冷静になつて考えた。

しめつばい土のにおい、緑のじゅうたん、光をさえぎるように生い茂る木々。はっぱの隙間からわずかにさす太陽のあかり。頬をなでる風はひんやりとしていて、澄んでいる。正確な時刻はわからないけれど、朝なのだろう。ことりたちのさえずりがときおり耳を打つ。

ここって、山だ。

それもおそらく、わたしがアキちゃんとはぐれた山。

「あー！」

そうだ。わたし、へんな場所につれこまれて、へんなおとこのひとに捕まったんだ。

おとこのひとの首に深々と突き刺さったナイフ。異常な光景に慄いているひまもなく、とつぜん現れた光に飲み込まれて……。

そこから、なにも記憶がない。

もしかして、あのへんな場所から、気を失ったわたしをアキちゃんが連れ出してくれたんだろうか。

「俺も気がついたらここにいた。おまえとまったく同じ状況だよ」
まさか夢……だったなんてことはないだろう。だって、アキちゃんも覚えてるんだもん。あれはたしかに現実にあった出来事なのだ。そう思いたくはないけど。

なんだかすつきりしないまま、わたしたちは再び王都を目指すことにした。

立ち止まっただけでも仕方がないし、積極的に関わりあいになりたくなかったというのも大きな理由だった。

もくもくと下山して、ふもとの村にたどりついたのは、ちょうどお昼をまわった頃だった。

「だーれもないねえ」

村の地名が表記された看板の前をとおって、動物よけかなにかの木柵をまたいで、ぽつぽつと建てられた民家の傍までやってきたが、ここにたどり着くまで、村人の姿を誰一人としてみることはなかった。

お昼時だから、みんな家でごはんでも食べてるんだろうか。

そう思って周りを見てみるけれど、どの民家からもかまどの煙は出ていないし、空腹を誘うよい匂いもしてこない。

「いくら田舎の村だからって、誰もいないなんてことはまずないはずだ」

アキちゃんは小さな民家を片っ端からノックした。けれど、どの民家からも返事はなかった。

村には、不気味な静けさが漂っている。

本来ひとがいるべき場所に、ひとがいない。それを意識すると、急に、この村がなにかとつもなくおそろしい場所に思えた。

臆病風に吹かれたわたしはアキちゃんにおいていかれないように、必死に彼のあとを追った。

そして、わたしたちが最後に訪ねたのは少し高い丘の上にある大きな民家だった。木の盾を意匠にした紋章がドアノブに刻まれている。

この村の村長の家だろうか。

アキちゃんが扉をノックする。一回、二回、三回。何度もノックを繰り返すが、返事はない。

やはり、この村には誰もいないのだ。

じんわりとした恐怖が足元に這いよってくる。一刻も早く、この村を離れたほうがいいんじゃないだろうか。なにかがおかしい。

「ねえ、アキちゃん……」

はやく村を出て、乗合馬車に乗ろう。

そう声をかけようとしたときには、アキちゃんはもう姿を消していた。

村長宅の扉が開いている。勝手に中に入ってしまったらしい。

このまま外にひとりで待っているのも怖くて、わたしもあわてて中にはいった。

玄関をくぐると、まず客間があつた。その奥にはキッチンがあつて、食事をとる大きなテーブルがある。椅子はぜんぶで四脚あつた。四人家族なのかな。怖さを少しでもまぎらわせるために、どうしてもいいことを考える。

アキちゃんはキッチンにいた。堂々と食べものを物色している。

「な、なにしてるの、アキちゃん。誰かが帰ってくる前にはやくでようよ」

「どれも腐ってるな。荒れちゃいないが、テーブルも床もほこりが積もってるし、この家の住人はそうとう長い間留守にしているらしい」

「そんなことどうでもいいよ。ねえ、はやく乗合馬車に乗るところにしようよ」

アキちゃんの腕をひっぱって、ひきずるようにして民家を出る。

民家を出たところで、胸をほつとなでおろす。この村に対して感じる気味悪さは変わらないが、他人の家に土足で踏み入る後ろめたさからは解放されたからだ。アキちゃんってけっこう図太い。

「この村、へんだよ。はやく外にしようよ」

「あんまり引つ張るんじゃないよ。それに急ぐな。転ぶぞ」

とにかく一刻も早くこの場を離れたかった。嫌がるアキちゃんをぐいぐい引つ張って、木の柵を乗り越えて村を出る。小石が敷き詰められた街道と思しき道をずんずん進み、村が見えなくなつたところでやっとひと安心できた。

はー。なんだったんだろう、さっきの村。誰もいないなんてぜったいおかしい。すごく嫌な感じがした。

わたしは山を降りたことがないから、ふもとの村を訪れたのははじめてのことだったけど、アキちゃんはどつだったんだろう。

一歩前を歩くアキちゃんに、なんとはなしに聞いてみた。

「アキちゃん、あの村っていつつもあるの？」

「そんなわけないだろ。あれは異常だ。集団でどこか他の場所に移動したにしろ、緊急的で突発的ななにかがあの村を襲つたのは確かだな」

「そつか。なにもしらなかった」

「俺達の住んでいた森は、正確な意味で隔絶されてるからな……」

そこでふと、アキちゃんは考えるそぶりをみせた。ああ、これはよくない兆候だ。アキちゃんはいちどなにかを考え始めるとまわりが見えなくなるのか、話しかけてもなにをしてもかまってくれなくなる。

その予感は的中で、思考の海に沈んだアキちゃんは、わたしがいくら話しかけてもなんの返事もしてくれなくなつた。

ただもくもくと、乗合馬車乗り場を目指して街道を歩く。

太陽はすぐに西にむかつて沈んで、あたりは飴色に染まっていく。だいぶ歩いた気がするけれど、誰ともすれ違わない。まるで世界には、アキちゃんとわたしふたりつきりみただった。

わたしたち以外の誰かがいない。ふだんは意識しない他人という存在をこんなにも心待ちにするのは、はじめてのことだった。

わたしがこんなにも不安がるのは、きっとあのへんな男のひとのせいだった。わたしたちではない誰かの死を見せつけられて、わた

したち以外の誰かの存在をこんなにも確かめたがらせている。

「……ついたみたいだな」

いつの間にか、思考の海から浮上したアキちゃんが言った。

彼の言葉につられて前方を見てみると、たしかに街道の近くに小屋のようなものが建っている。

あれが乗り合い場なんだろうか。自然と足が速まる。あたりは既に夜の気配に包まれていた。完全に夜になる前に目的地につけたのは幸運だった。

「疲れたねえ。でもうれしいな。馬車でいく楽ちんな旅だね！」

「さすがに今から乗車できる馬車はないだろうが、野宿はせずに見そうだ」

こころなしか、アキちゃんの声も弾んでいた。

しかし、小屋に近づくにつれて、その仔細がわかると、わたしたちは落胆せざるをえなかった。なぜなら、あたりが暗くなりはじめているというのに、その小屋にはなんの灯りももっていなかったからだ。

小屋の扉には、木で作られた白塗りの看板が掛かっていた。『乗り合い場』と彫られた文字の下には『休業中』の文字。

つまり、ここはかつては乗り合い場であつたけれども、いま現在はそうではないということだ。

アキちゃんは小屋の扉に手をかけて、何度か前後に揺さぶった。鍵が掛かっているらしい。

軽く舌打ちすると、アキちゃんは腰に下げた袋から針金を取り出して錠前に突き刺した。地面に片膝をつき、扉に耳をあてて探るように繊細な手つきで針金を動かす。

「アキちゃん……それって……」

「うるせー。いま大事なことだから黙ってる」

まさかの、本日二度目の不法侵入。

アキちゃんは見事に、針金一本で小屋の扉を開けてみせた。同時に、かび臭いこもった空気がむうつと漂ってくる。

「なにしてんだ、さつさと入れよ」

「け、けど……」

「きたねえけど野宿よりはマシだろ。外で寝たいっていうなら、止めないけど」

少し意地悪な言い方で、アキちゃんはわたしの腕をとり、小屋の中に引つ張り込む。

薄暗い小屋の中を見回すと、案外広いことが分かった。

扉からそう遠くないところに、カウンターがある。おそらくここが乗合馬車の受付だったんだろう。待合室らしきところには大きなソファがふたつ並んであって、その向こう側には大きな戸棚がひとつあった。

待合室の中央には、青銅で作られたランプがひとつ吊るされている。アキちゃんは戸棚からランプの油を拝借して、ランプに火をつけた。ほっとするような、橙色の炎が夕闇に揺らめく。

「誤算だったな……まさか乗合馬車が使えないとは思ってなかった」
アキちゃんはひとりごとのように呟いて、ソファの上に腰を下ろした。わたしもならってアキちゃんの隣に座ると、半眼で睨みつけられた。

「ソファならあっちにもあるだろ」

その指摘はごもつともだったので、すぐごと向かい側のソファに移動する。紅色の布で覆われたソファはほこりっぽかったが、すわり心地はいい。勝手に無人の小屋を借りることに対しては抵抗があったが、背に腹は変えられない。せめてあまり汚さないようにしようと思った。

「ほら、食えよ。それが今日の晩めし」

アキちゃんが放つてよこしてきたのは乾パンたったの3枚きりだった。

「これっぽっち？」

「馬車が使えないじゃ、この先どうなるのか分かんねー。食料が手に入る目処が経つまでは節約しねえと」

育ちざかりの身としては、これはつらい。うらめしげなわたしの気配が分かったのか、アキちゃんは嫌そうに眉をひそめた。

「もともとふもとの村で食料とか本格的に揃える予定だったんだ。おまえは変なのに捕まるし、村は無人だし、馬車は使えないしで予定は狂いっぱなしだ。そもそも、おまえがついてくること自体、予定外なんだけど」

「それも人生をたのしくするためのスパイスだよ、きっと」

「いらねー。全力でいらねー」

ふたりで向かい合って、ちまちまと晩御飯……といえるかは微妙だけど、泣き声をあげるお腹を慰めた。

ブーツを脱いで、歩きっぱなしで疲れた足をソファの上に投げ出す。お風呂なんてぜいたくなことは言わないけど、せめて体が拭けたらなあ。水場の近くに寄ることがあったらアキちゃんにお願いしてみよう。

閉じられた空間と、人の手による灯りによってすっかり寛いでしまっているわたしとは正反対に、アキちゃんは熱心に戸棚をあさっていた。

食事を終えたら一気に疲労が襲ってきてしまつて、そんなアキちゃんを咎める元気はなかった。そもそも、この場所で寛いでしまっている時点で、わたしにそんな権利はないんだけども。

「アキちゃん、なにしてるのー？」

「地図を探してるんだ。おおまかなものしか持ち合わせがないから、もつとこの辺りについて詳しい地図がほしい。……おまえも手伝えよ、ばかリン」

ぺしつとわたしの頭を叩いて、アキちゃんが睨んでくる。そんなに怒ってばかりで疲れないのかなあ、アキちゃん。

そんな風に、のんきに過ごしているときだった。

とつぜん、谷底から聞こえる獣のような叫び声が空気を切り裂いた。慌てて飛び起きたわたしはソファから転げおち、アキちゃんは周囲をうかがうように身構えた。

今日は厄日だ。今度はなにが起こっているんだろう。
窓の外を見ると、もう完全に夜のとばりはおち、真っ暗にな
っていた。

「リン、窓に近づくな」

そういわれて、わたしはアキちゃんの傍に走った。

戸棚を背にして、アキちゃんは窓と扉に注意を払っている。もし
も、仮に、何者かがわたしたちに危害を与えようと進入してくるな
ら、まずそこだった。

「あ、あかり、消したほうがいいかな……」

「……そう、だな」

アキちゃんの返答は歯切れが悪いものだった。

灯りを消すことにためらいがあるらしい。たしかに、外はまっく
らだし、視界が限られるのはあまりよいことには思えない。

けれど、灯りがついていているということは、そこにんげんがいる
ということが相手にわかってしまうということだ。

さきほどの声の主が灯りのある意味を理解するかはわからないが、
灯り自体がなんらかの目印になってしまうことは確かだった。

そもそも、わたしたちを害する意思があるのか、ないのかも、わ
からないけれど。

再び、獣めいた叫び声が、今度は二度続けて聞こえた。最初に聞
いた声よりも大きく、なにより、思っていたよりも近い！

どくんどくと耳の奥で心臓の音が響く。てのひらはいやな汗を
かいている。アキちゃんの服の裾をつかもうと伸ばした手は、邪魔
だばかりにはねのけられた。行き場を失った手を胸の前で組み、
わたしも耳をすます。

なに食わぬ顔で、見知らぬ何かはとおりすぎてくれただろうか。
それとも。

「あ、アキ……」

「だまつてろ」

どすんつと、小屋全体が揺れた。

大きく体が傾きかけ、あわてて戸棚にすがりつく。かろうじて転倒はまぬがれた。

顔をあげると、ほの暗い室内に、きらりと銀色の輝きが弧を描くのがみえた。腰元に隠していたナイフをアキちゃんがかまえたのだ。なにか、くる！

そう思ったのが先か、そのなにかが到達したのが先か、正確なところはわからない。

目の前で、黒い影のようなものとアキちゃんがもつれ合うように床に転がった。ランプの灯りに照らされて、黒い何かは姿を現す。その何かに陰影はなく、ただただ異様で、黒一色の、生き物と呼ぶことを躊躇わせる存在だった。

いうならば、これは、影そのものだ。

けれど、わたしたちのうしろを無邪気についてまわるかわいらしいものではない。もっと、なにか、まがまがしいものに思えた。

「あ、アキちゃん！」

黒い影が咆哮をあげる。びりびりと空気が震え、窓ガラスががしやんと割れる音が聞こえた。まるで、その圧倒的な力をわたしたちにみせつけるみたいに、影は大きくしなった。

アキちゃんは影の下敷きになってしまっていた。どうしよう。いまはかろうじて右半身が見えている状態だけれど、いずれぜんぶ飲み込まれてしまいそうだ。

わたしはとつさに戸棚をあけて、中に入っているものを黒い影に向かって投げつけた。

お皿やコップ、スプーンといった食器類がつぎつぎと無残な姿で床に散らばる。黒い影はまったく堪えた様子もなく、まるで食事でもするかのように、じわりじわりとアキちゃんの姿を隠していつてしまう。

「この！」

こんなところでアキちゃんを失うわけにはいかない。

そう思うのに、いったいどうすればアキちゃんを助けることがで

きるのか、ぜんぜんわからない。悔しい。こんなことなら、アキちゃんと一緒に魔法を習っておけばよかった。つい最近、同じような後悔をしたばかりだというのに。

そうだ。アキちゃんは、助けてくれたんだ。それなのに、どうしてわたしはアキちゃんの助けになれないんだろ。

「どっかいきなさい！ここはおいしいものなんてなにもないよ！」

わたしは黒い影にむかって体当たりをした。なんども、なんども、なんども！

けれど、影はびくともしない。

それどころか、わたしをもつかまえようとその体を伸ばしてきた。大きな黒い影が、しりもちをついて座り込むわたしにむかって覆いかぶさるうとする。逃げ場はない。このまま、しんでしまうんだろ
うか。

そのとき、影がまつぶたつに割れた。

上下に分断された黒い影は、あっけなく溶けるように消えてしまった。一瞬だった。

「へ……？」

いったいなにが起こったのだろ。

いや、それよりなにより、アキちゃんは無事なんだろうか。

わたしは床に倒れているアキちゃんに駆け寄ろうと立ち上がるが、すぐにへたりこんでしまった。足が震えていることを利かない。なんとという役立たずな足なんだ。

「おや、生きてるね。君達は実に運がいい」

場違いな、なんとも明るい声だった。

声の主はアキちゃんの頭を靴で軽くこつく。すると、ちいさなうめき声が出た。ああ、よかった。アキちゃんは生きている。

ほっとするのもつかの間、声の主はわたしの目の前までやってきた。床にすわりこんだわたしは、声の主を仰ぎみる。

まだ若い、おとこのひとだった。細身の長身で、長めの金の髪をうしろで括っている。少し切れ長の目は、まるで夏の青空のように

澄んだ色をしていた。服装は至って簡素で、あら染めをした麻の服の上から苔色のマントを羽織っている。そしてその左手には、長く鋭い銀色の片刃の剣が握られていた。

じっと見つめていると、急におとこのひとは破顔した。

「なんだ。まだこどもか、残念。そっちの坊主、手当てしてやるから運ぶの手伝ってくれるかい？」

まったく汚れない長剣を鞘にしまつて、アキちゃんのからだを動かそうとするおとこのひとの姿をみて、はじめて、助けられたのだとわたしは実感した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9153o/>

夜明けの魔術師

2011年7月24日03時19分発行